

私の家族研究について

山根常男

どうも過分なご評価ありがとうございました。

今日私が話しますことは、ご案内状にあるように、私の研究というと家族研究ということになりますが、これは、言い換えれば、私の人生経験といってもよいと思います。こういう話をするのは、今日参加になっている学生さんたち、若い人たちには非常に参考になるんじゃないかと思えますし、また同僚の皆さんには私という人間を知っていただく上に役立つものではないかと思うわけです。

私は大学の教員として生涯を過ごしてきましたが、大学教員の任務といえ、それは研究と教育であるということが出来ます。ところで、何を教育するかといえ、それは自分の研究したことを教育するわけですから、結局、大学教員の最も基本的な任務はといえ、それはあくまでも研究である、と私は思います。さて、そこで大学教員の研究の対象は何かと言いますと、それは学問です。学問には大きく分けて人文科学と自然科学とがありますが、私はそのうちの人文科学を選択しました。そして、この人文科学もたくさんに分化していますが、私はその中で社会学を勉強し、そして、今まで特に家族に焦点を当てて研究を続けてきたわけです。そこで、私はこれから、私が自分の人生においてなぜ学問研究を志すようになったか、なぜ人文科学を選んだか、そのうちなぜ社会学を選んだか、そしてそれがなぜ家族の研究に収斂してきたか、今日は

そういうことをお話ししようと思うわけです。

1

さて、人は誰でもその人生遍歴におけるいろいろな面での経験において、自分に影響を与えた人物をもっているものです。そこで結論的にいいますと、私の学問遍歴において決定的な影響を与えた人物として、二人をあげることができます。その一人は私の姉です。私の姉は、私よりも10歳近く年上ですが、女学校のころからたいへん詩が好きで詩を詠んでいました。この姉は、室生犀星に師事して、のち水野家に嫁いで、名前を水野八重子といい、戦後間もなく死亡しましたが、『水野八重子詩集』という詩集を出しています。

ところで、私の小学時代の最大の楽しみは何かというと、童話を読むことでした。当時、名古屋にあった私の家では、よく家族中で百貨店に出掛けましたが、私は少年時代、そこで本を買ってもらうのが唯一の楽しみでした。あるとき、百貨店のブック・コーナーで私がさかんに本を探していると、私の姉がやって来て、「常ちゃん、この本にきなさい」といって、ある本を取り出してくれました。その本は非常に分厚い本で、綺麗な装丁がしてあって、『ギリシャ神話』と書いてありました。つまり、姉は私に「ギリシャ神話を読め」と薦めたわけです。結局、私はその本を買ってもらうことにしました。当時、私は毎日本を読み、そしてこれは今でも続いているのですが、夜寝る前に必ず本を読みながら寝るとというのが習慣でした。そういうような状況で私はこの分厚い『ギリシャ神話』を毎日毎晩読んで、ほとんど丸暗記してしまったようなわけでした。

ここでいくつかのエピソードを思い出すのですが、そのうちの一つ二つを挙げてみると、私の小学校5、6年生のときでした。小学校には一人の仲のいい森君という友達がおりましたが、この森君とは非常に仲良しで、いつも本を読んではそれを交換して読みあったものです。で、私はこの森君に「とってもいい本を買ってもらって、とても面白いから、この本を読め」と言って、ギリシャ神話を貸し、森君はまた森君で「この本が最近読んでとても面白い」と

言って私にある本を貸してくれました。それはどういう本かというところ、『アルセーヌ・ルパン』でした。ところが私には、その『アルセーヌ・ルパン』はちょっと面白くない。一方また森君もギリシャ神話を読んでちょっと面白くない。翌日、二人はそれぞれ10頁ばかりずつ読んで、返しあったことを覚えております。「山根君、この本のどこが面白いのか」と私に言った彼の言葉を今でも覚えています。

それからまた、この小学校のときに、私の家では確か『子供の科学』というタイトルの雑誌をとっていました。この『子供の科学』には相談欄がありました。6年生のときだったと思いますが、私はその相談欄に投稿しました。「私はギリシャ神話を読んで非常に興味をもった。そこで、ギリシャに行って古代ギリシャの神話の世界を研究したい。どうすればよいのか。どういう方向へ進んで行ったらいいのか」という趣旨のことを相談欄に出したことを覚えています。そのとき、どういふ答えがきたかということについては、いま覚えてはおりません。

さて、やがて私は小学校から中学校にはいったのですが、中学1年生のとき私の父親が私に向かって「お前は将来何になるんだ」と質問したことを覚えています。そのころの中学生といえは12、3歳ですが、とにかくそのころの子どもはみんな「自分は陸軍大將になりたい」とか「自分は総理大臣になりたい」とか「電車の運転手になりたい」とか、いろいろな夢をもっていたものです。ところが現在の若者には、小此木啓吾さんがエリクソンの言葉を借りて「モラトリアム人間」と言ったように、なんだか夢がないように思われるのですが、その当時の私たちはまだ幼いころからみんな夢をもっていましたね。それで中学1年生のとき父親から「お前、何になりたいんだ」ということを聞かれたときに、私は「文学博士になりたい」と答えたことを覚えています。

それで中学にはいり、今度は中学を卒業する段になります。5年生になって、いよいよ中学を卒業するというときに、私の父親は私に向かって「お前は高等商業学校へいったらどうか」ということを言いました。その頃、中学卒業は5年で、進学する場合、私には、高等学校か高等商業学校か高等工業学校に

いくつかの3つの選択がありました。私は名古屋におりましたので、これらの学校はすべて名古屋にありました。当時、高等商業学校は高商といい、高等工業学校は高工とっていました。私の父親は「お前は高商へいったらどうだ」と言ったわけです。そのとき私は即座に答えました。「僕はいやだ。僕は高等学校へ行きたい」と言いました。私の父親は幾分悲しそうな顔をしていましたけれども、何も私に「行ってはいけない」というようなことは言いませんでした。ただ、私をじっと見ていた父親のあの顔を今でも覚えています。

そして、私は高等学校の文科にはいったわけですが、高等学校では私は、中学校のときもそうでしたが、ボートの選手をやっていました。高等学校にはいると、当時、インターハイが8月の月上旬に隅田川で行われていて、そのために、私たちは毎年1学期が終わるとすぐに東京の隅田川に合宿し、だいたい20日間ぐらい東大艇庫でボートを借りて練習をしたものです。この合宿生活には、東京にいる先輩が続々とやって来て、いろいろと話をしたわけですが、そのボート部の先輩の中に加藤将之さんという先輩がいました。加藤先輩はカントの研究をした人です。この加藤先輩が私に「君はいったい、高等学校を出たらどこへいくつもりだ」ということを聞き、そこで私は自分の希望を述べました。私は古代社会の考古学的研究をしたいというようなことを、ギリシャ神話の話をしながら話しました。そうすると、加藤先輩は私に「今度、東大の理学部に人類学科が創設されることになったが、須田昭義先生をよく知っているから、もし君が望むならば、そこを受けられるかどうか、いっぺん聞いてみたらどうだ」ということを言ってくれました。そこで、私はさっそく須田先生に手紙を出し、その年の秋に上京し、須田先生の教室へ行って、自分の希望を述べました。そうすると、須田先生はこういうことを言いました。「君がそういう研究をしたいというのはよく分かった。しかし、この大学の人類学科はあくまで理学部にあるので、来年いったい志願者がどれくらいあるか分からないが、もし理科の志願者が定員4名以上になると、入学試験を受ける資格はなくなる」と。そして、私のしている、またやりたいと思っている研究を聞いて、「君がそういうことを研究したいんだったら、文学部へいったらどうだ。とくに文学部

の社会学科かあるいは宗教学科へいったらどうだ」，こういうふうなサジェスションを受けたわけです。10月でした。私は帰って，いろいろ2，3ヵ月考えた末，ついに「文学部の社会学科に行くことにしよう」と決めたわけです。それまで私は，社会学という言葉はぜんぜん知らなかったのですが，そんなようなわけで，私は大学では社会学を専攻したわけです。

さて，大学時代特に思い出に残っているのは，私が「社会調査」という講義を1年生のときに聞いたことです。だいたい「社会調査」という講義は，2年か3年のときに聞くものですが，私はぜひフィールド・ワークを早くやってみたいという希望から，まだ1年生でありながら，「社会調査」の講義を聞いたわけです。そして，実際に夏休みになると，農村の分家慣行の現地調査に出掛けました。そのときに，当時その社会学研究室には先ほど話もあった，渡辺萬寿太郎先生だとか及川宏先生，それに本学と非常に縁の深い喜多野清一先生なんかがおられたわけです。一緒に甲府の山梨県の農村に調査に行ったことを今でも覚えています。そして，私はそういうような状況の中で，特に日本以外の外国でフィールド・ワークをしたいという要望をもったわけです。そのことは，私が書いた卒業論文，「植民社会学序説」に現れています。そして，私はとにかく日本を離れて外国へ行って研究をしたいという気持ちでいっぱいでした。そのため大学を出ていよいよ就職するとき，それを主任教授の戸田貞三先生に話して，いろいろ相談しましたところ，「ちょうど北京の新民学院という中国の官吏を養成する大学校に，君の先輩の野久尾徳美君がいているから，彼に君のことを頼んでみよう」というわけで，結局，野久尾氏の引きで，私は中華民国北京国立新民学院へ就職することになりました。そのときに，赴任するにあたって，向こうから手紙が来て，「朝鮮，満州を視察しながら赴任せよ」という一種の命令を受けました。そこで私は考えたわけなのですが，朝鮮，満州を視察しながら赴任せよというなら，朝鮮，満州についていろいろとよく研究をしてから行くのが一番いいというふうに今では考えますが，そのときに私の頭に浮かんだのは，我々にとって大切なのは，ファースト・インプレッション，第一印象である，だから，むしろ変な予備的な知識をもたないで行ったほうがよ

ということでした。そういうわけで、私は朝鮮や満州については何も勉強することなく、行ったわけです。そして、現在のソウルから鴨緑江を渡り、長春（その頃は新京とっていました）、ハルビン、チャムス、さらには、チャムスから1時間バスに乗って行きますと、当時の開拓移民団の村がありましたが、そういう辺鄙な村まで行って北京に赴任したわけです。私はこのようにして、新民学院の講師として勤めたわけですが、講義をしたことは1回もありませんでした。そして、結局、北京には6ヵ月しかいませんでした。向こうで徴兵検査を受けて、すぐにいったん日本へ帰って入隊したからです。入隊すると、中国へ連れて行かれました。中国でいろいろなところを転々とし、やがて、ラバウルのあるニュー・ブリテン島に行きました。そこで終戦を迎えたわけです。

2

終戦の翌年、私は日本へ帰りました。戦後の私は、もう全く心が空白で、心の支えというものに渴望していました。戦争に敗れた兵隊の気持ちというものは、私と同年配の方はよくご存じだろうと思うのですが、私には心の支えが何よりも必要でした。戦後1年経ってラバウルを出発した私の乗った船は、名古屋港へ着きました。名古屋には私の姉がまだ生きていまして、私は姉の家に厄介になりました。しかし、先ほど言ったように、心の支えが欲しかった私は、さっそく、姉の家の近くにあったキリスト教会の門を叩きました。ところが、私が最初に聞いた牧師の言葉は、「あなたは親やきょうだいの絆を断って、神につかえる覚悟がありますか」という非常に厳しい言葉で、私はそれを聞いて全くびっくりしてしまいました。2、3回このキリスト教会に通いましたが、あとで新約聖書のマタイ伝第10章に、ちょうどその牧師さんが言ったと同じことが書いてあることが分かりました。このマタイ伝の第10章というのは、信仰についてイエス・キリストが自分の12使徒に向かって語った言葉ですが、こういう言葉があります。「地上に平和をもたらすために、私が来たと思うな。平和ではなく、つるぎを投げ込むために、来たのである。私が来たのは、ひとをその父と、娘をその母と、嫁をその姑と仲たがいさせるためである。そして、家

の者がそのひとの敵となるであろう。私よりも父また母を愛する者は、私に相応しくない。私よりも息子や娘を愛する者は、私に相応しくない」。これは、新約聖書のマタイ伝の第10章に書いてあるイエスの言葉です。私はそれを知って本当に動転し、結局は、キリスト教への入信を断念したわけですが、今から考えると、私は、私のそのときの心の動転がいかに浅はかなものであったかを、しみじみと感ずるわけです。つまり、このマタイ伝の第10章は、神を信ずる覚悟というものが、いかに真剣なものでなければならぬかということ逆説的に表現しているわけです。そして、むしろ、我々はその裏の意味を解さなければならぬと思います。つまり、神を信ずることによって真に家族愛を実現することができるのであって、キリスト教は決して家族愛を否定しているわけではないのです。

さて、私は、戦後の日本の社会崩壊の状況の中にあって、自分の学んできた社会学という学問に非常な不満をもつようになりました。つまり、「社会学はもっと現実を問題にしなければいけない」、そういう不満です。そこで、私は、私の図書目録にありますように、南山大学にはいった翌年に、「社会学と社会問題」という論文を書きました。また、1950年（昭和25年）には、ヒラー（E. T. Hiller）というイリノイ大学教授の書いた社会学的研究としては非常に珍しい本、『ストライキー集団行動の研究（*The Strike—A Study in Collective Action*）』を翻訳しました。

さて、私が大学で教鞭をとるようになったのは、当時の私の主任教授であった戸田教授の推薦で名古屋市立女子専門学校にはいったことから始まります。そして、やがて2年経つと、岐阜大学の学芸学部から「ぜひ来てくれ」という要請を受け、岐阜大学に2年いますと、さらに、「南山大学に社会学部を創るからぜひ来てくれ」という要請を受けました。このようにして、私の大学教員としての生活が始まったわけです。

で、この南山大学にいるときに、私は、ある日、名古屋大学医学部精神医学教室の村松常雄教授の訪問を受けました。村松教授は、私の家へ突然電話をかけてやって来られ、私に「東京大学の尾高先生から君の名を聞いた。名古屋大

学医学部の精神医学教室に今度アメリカの財団から金をもらって、人間関係研究班という研究グループをつくることになった。これは学際的な研究グループで、精神医学のみならず心理学，社会学，特に社会学のひとにぜひ来てもらいたいと思っている。で、君の名前を聞いたので来たのだが、ひとつ社会学者としてこの人間関係研究班に加わってもらいたい」，こういう話だったのです。

そこで、私はそういう村松先生の話にたいへんに共鳴しまして、直ぐにそれに賛同したわけです。そして、研究班で私は初めて珍しいひとに会いました。それは、当時ミシガン大学から来ていたアメリカのジョージ・デボス (George De Vos) という臨床心理学者です。このデボス氏は、臨床心理学をやっていましたが、人類学を研究したひとでもあったのです。で、私は当時社会学の本はもちろんですが、それ以外にもエーリッヒ・フロム (Erich Fromm) の、例えば、『自由からの逃走 (*Escape from Freedom*)』とか、それから “*Man for Himself*” これは『人間における自由』という題名で訳されている本を読んで、精神分析については一応の知識はもっていました。私は、村松教室では結局3年間、人間関係研究班の仕事をしましたが、そのうちの1年は、南山大学から名古屋大学医学部に内地留学して、その間村松教室で、精神医学者や心理学者と盛んに話をしたわけですが、だいたいこの当時の日本では、フロイトの理論はネオ・フロイディズムによって克服されたというのが、一般的傾向でした。そうしたわけで、村松教室もご多分に漏れず、このフロイトの著書はいわば禁書のようなものでした。ところが皮肉なことに、この教室で私はいわばフロイディアンになったわけです。で、ここでもひとつのエピソードを思い出します。ある日、私がデボス氏やその他の医局員と一緒に堀要助教授の部屋で、いろいろと精神分析について話をしていました。すると、村松先生が部屋に入ってきました。そして「君たち、何を話しているんだ？フロイトの話をしている？君たちは、フロイトを読む前に、まずカレン・ホーナイ (Karen Horney) を読みなさい」と言いました。このことは今でもずっと覚えています。カレン・ホーナイといえば、ネオ・フロイディズムの創始者の1人です。要するに、村松教授は、フロイトの書物を読むと一種のアディクションつまり中毒にかかるから

中毒にかからないようにするために、あらかじめこのカレン・ホーナイを読むべきだと言いたかったのです。そんなようなわけで、この村松教室では、フロイディアンは、オーソドックス・フロイディアンとネオ・フロイディアンの二つに分けられ、デボス氏は、オーソドックス・フロイディアンのジャンルの中に入れられておりました。

フロイトとフロムのことですが、フロムはフロイトの学説を生物学主義と批判しました。フロムは、元来、社会学者ですが、精神分析を受けた社会学者でした。彼はフロイトの精神力動の理論と社会学の理論とを結合して、立派な理論を構成しております。その理論は、たしかに、青空に聳え立つゴシック建築のように美しく壮麗です。しかしながら、残念なことに私には心に迫るものがないのです。フロイトの本を読むと、例えば、性衝動、近親相姦願望、去勢不安、ペニス願望といったような、いわば反吐の出るような概念がいっぱい出てきます。それに比べるとフロムのこの理論構成は非常に素晴らしいのですが、心に迫ってくるものがありません。ところが、フロイトの仮説には、迫ってくるものがあるのです。人間とは何か？人間というものはけっして美しいものじゃないわけです。その点から考えて、人間とは何かを反省させる上にフロイトの学説は強く心に迫ってくるものがあるのです。それで、私は不思議なことに、このフロイトの書物が禁書の村松教室で、かえってフロイディアンになったわけです。そういう意味で私に決定的な影響を与えた第二の人物は、フロイトであるということが出来ます。

3

さて、村松教室で研究しながら南山大学で5、6年経ったときに、私は東大の尾高邦雄先生と村松先生に推薦状を書いてもらって、フルブライト研究員として、アメリカのミシガン大学に留学しました。で、その時に私の経験した二つの重要なことは、まず、私の留学したこのミシガン大学のあるアナーバーの大学キャンパスのすぐ近くにあった大きな本屋の社会学コーナーで、『キブツ (Kibbutz)』という耳慣れない本に初めて出会ったことです。非常に変なタイ

トルですが、このサブタイトルは『ユートピアの実験』となっており、このユートピアという言葉に非常に引かれたのです。そこでこの本を手にとってみると非常におもしろいことが書いてあります。そこで、さっそくその本を買った次第です。それは、メルフォード・E・スパイロ (Melford E. Spiro) という人類学者の書いた本です。

それから今一つは、アメリカで、日本ではもうフロイトを克服したといわれているネオ・フロイディズムが実はマイノリティー・グループで、オーソドックス・フロイディズムといわれているものこそマジョリティーであるということを知ったことです。そして、私はアメリカにいるとき、キブツに関する研究論文を蒐収し、またフロイトの文献を蒐収してきたわけです。私は今でも覚えています。大きなフット・ロッカーにたくさん本を買ってきましたが、その本の大部分がフロイトの本であったのです。その当時アメリカでは、フロイトがいかに読まれていたかということは、例えば、駅なんかのキオスクへ行きましても、ペーパー・バックのフロイトの本が置いてあったことと判ります。あの光景は今でも覚えています。日本ではちょっと考えられられないことですね。日本の駅ではフロイト心理学なんて本はありません。アメリカでは、例えばフロイトの名著である『文化への不満 (Civilization and its Discontents)』というような英訳の本のペーパー・バックが置いてあるのをよく見かけたものでした。そんなことは日本では考えられないことですね。

いずれにしても、そういうふうにして日本へ帰ってきたわけですが、最初に私は、著書目録に書いてあるように、翌年、「社会学と精神分析」という論文を書きました。それから、その翌々年にはさらに、「キブツにおける Collective Education とパーソナリティ発展の問題」という論文を書きました。Collective Education というのは、キブツで行われている集団教育のことをいいます。

そして、このイスラエルのキブツの研究の本を読んでいる間に、これはどうしても自分の目でキブツを見なければいけないという気持ちになりました。そして、イスラエルに行ってみたいということで、ちょうど私があのアメリカへ留学してるときにお世話になった現在パーデュ大学教授のゴードン夫妻

(Leonard and Margaret Gordon) が日本に来ていたので、その人に電話をかけて、「実は、キブツへ行きたいんだけど、どうしたらよいか、何かいいサジェスションがないか」と尋ねてみました。そのとき、ゴードンさんは、「それならイスラエルの公使館（現在は大使館になっている）のカルチュラル・アタッシュェに相談してみたらどうですか」とサジェストしてくれたのです。私はさっそく上京し、そしてイスラエルの公使館へ行って、カルチュラル・アタッシュェ、つまり文化担当官に会ったわけです。私は自分の希望を述べて、私の書いた論文、「集団教育とパーソナリティ発展の問題」（その論文はレジュメを英語でかなり詳しく書いていました）を手渡しました。文化担当官はそれを見まして、「とにかくよく分かった」と言って、私にこういうことを言いました。「君がどうしてもイスラエルでキブツの研究をしたいならば、イスラエルでの滞在費はイスラエル政府がもつ。ただし、イスラエルまで行く旅費まで出すことはできない」と。そこで、私はさっそく今度はそのイスラエルへ行く旅費の工面をしたわけです。しかし貧乏な私には自費で行く余裕はありません。結局、アメリカのアジア財団に自分の希望を述べて、申請したわけです。そして、それが非常に運よく通りまして、結局、旅費はアジア財団から、イスラエルの滞在はイスラエル政府の援助で、キブツの調査をすることができたわけです。キブツの調査をしたのは、私が南山大学を辞め、大阪市立大学に入って直ぐのことでした。私がキブツへ行って非常に驚いたことは、キブツでは親と子どもとは一緒に生活はしてないけれども、親と子の間に非常に強い絆があるということでした。親・子のアイデンティティ、相互認知ということ、これが家族の本質であって、キブツには家族というものが厳然として存在しているという私の考えを、「家族の本質—キブツに家族は存在するか」という論文にまとめて日本社会学会に報告しました。それは、私の業績表に載っていると思いますが、これは先ほどのスパイロのキブツに家族はないという結論に対する反論であったわけです。しかし、スパイロも、後に補遺を発表して、「キブツには、マードックの家族の概念に従えば、家族はないけれども、家族の概念を1つの情緒的な単位としてみるならば、立派にキブツにも家族はある」というこ

とを言っています。こういうふうにして私はその後しばらくこのユートピア社会，ユートピア的実験というものに非常に興味をもってその方面の研究をしたわけです。特に18世紀頃にはヨーロッパで迫害された，例えば，シェイカーズ (Shakers)，バプティスト (Baptist)，アナバプティスト (Anabaptist) というような教団がどんどんとアメリカの新天地にやって来て，そこにいわゆるユートピア共同体をつくりました。例えば，ハテライト (Hutterites) とかアマナイト (Amanites)，アミッシュ・ソサイアティ (Amish Society) というような宗教的なユートピア共同体がたくさん18世紀から19世紀にかけてアメリカに雨後の筍のようにできたわけです。それからまた，世俗的なコミュニティとして，イギリスのロバート・オーエン (Robert Owen)，フランスのシャルル・フーリエ (Charles Fourier) あるいはエティエンヌ・カベール (Étienne Cabet) の考えに方に基づいたユートピア共同体がたくさんできたわけです。そういう研究を，これは文献研究ですが，したわけでありませう。

4

しかし，そういう研究をしてる間に，私は，やはり社会が成立するためには家族という存在がいかに重要であるかということに気づき，家族の研究にしたいに収斂していったわけです。そして，家族というものは全体的，力動的，発生的，歴史的に研究しなければいけない，という考えをもつようになりました。実際，社会学者といわれる人達の学説史で名の通っている本当の大学者達は，すべて家族について非常に重要な研究，発言をしているのです。例えば，オーギュスト・コント (August Comte)，フェルディナント・テンニース (Ferdinand Tönnies)，エミール・デュルケイム (Émile Durkheim)，ゲオルグ・ジンメル (George Simmel)，マックス・ウェーバー (Max Weber)，特に最近ではタルコット・パーソンズ (Talcott Parsons) 等々をあげることができます。ところが，現在の日本では分業化した社会学がとかく門戸を閉ざして，「家族の研究？それは家族社会学者のやることだ」，こういうような傾向があります。しかし，社会学を勉強するときには，家族の研究は，もう必要欠くべからざ

るものであると、現在、私は痛切に感じています。しかも一方また、家族というものは単に社会学の研究領域ではない。家族は、心理学、精神医学、経済学、人類学といった学問の学際的な研究の対象であるということを、最近ますます感じるようになってきました。特に第2次世界大戦後、歴史学、それから精神医学の面において家族の研究は非常に重要な意味をもってきており、特に歴史学の研究では、現在、例えば、丸善や紀伊國屋へ行くと、イギリスやフランスの家族史の研究がいっぱい出ております。

そういうようなわけで、家族の研究は、先ほど言ったように、全体的、力動的、発生的、歴史的でなければなりません。このためには、家族というものを二つの文脈、つまり、個人、家族、社会という横の文脈と、過去、現在、未来という縦の文脈の二つの文脈の中で把えて考えていく、そして、ルーバン・ヒル (Reuban Hill) という学者が言ったように、「家族の一般理論 (general theory of the family) いうものをつくらなければならないと考えるようになりました。家族は単なる社会学の問題ではないのです。私は、現在、むしろ社会学者は家族の一般理論、つまりすべての学問に利用されるような有効な理論をつくる責任があると痛感しているものです。そして、数年前、私は『家族と人格 (*The Family and Personality*)』という本を書きました。私の今言ったことは、この本の序論の中に書いてありますが、この本は『家族の力動理論をめざして (*Toward a Dynamic Theory of the Family*)』というサブタイトルをもっています。個人と家族の関係でいえば、家族は人格形成の場です。人格形成は、社会学にとって非常に重要な問題です。したがって、私は、社会学者は確たる人格理論をもたなければならない、こういうことを主張したいわけです。そしてさらに、昨年、私は『家族と結婚 (*The Family and Marriage*)』という本を書きました。これは、サブタイトルが『脱家父長制の理論をめざして (*Toward a Theory of the Post-Patriarchy*)』となっています。脱家父長制というのはちょっと聞き馴れない、日本ではもちろんのこと、世界的にも使われていない言葉ですが、あえて使いました。これは家族というものを過去、現在、未来という文脈においていかに把えるべきか、つまり、そのためには、現

在我々はいかなる時代にあるかという「現在規定」が非常に重要であるということ強調して、家族の変化というものを、その歴史的必然性において把握しなければいけない、ということを考えてこの本を書いたわけでありませう。

さて、私はこの『家族と人格』、『家族と結婚』という本を書いて、最後に『家族と社会 (*The Family and Society*)』という本を書きたいと思っています。それは、サブタイトルとして『社会生態学の理論をめざして (*Toward a Theory of Ecosociology*)』という題名にしたいと思っています。つまり、文明の危機、特に文明先進国の日本やアメリカなんかの状況を見てみますと、そこには営利中心の経済的合理性を追求して、人間が人間でなくなる、ロボットになってしまふ、非人間化の危険性、それから社会についていうと、そういうロボットたちが完全管理化という政治的合理性の罠に陥る危険性がある、そういう文明の危機感を私はもっているわけですが、未来の文明においては、家族という制度は人間性の砦、プライバシーの砦としてきわめて重要な存在であると信じているわけですね。人間性の砦であるということは、結局、人間をして人間たらしめる存在であるということです。プライバシーの砦であるということは、結局、家族というものは社会に対する抗体であるという意味をもっていることですね。そういう意味で、私は、家族というものが、どんどんと未来へ暴走して行く社会に対する一つの抗体としての意味をもつ存在でなければならぬというふうに考え、社会学は、結局、社会生態学でなければならぬと考えている次第です。『家族と結婚』において私が歴史的必然性ということを強調しましたが、ここでは私はむしろ普遍性ということ強調することになると思っています。

私がこの年になってまだ本を書くというようなことを考えているのか、とお笑いになるかもしれませんが、ここでも私に発破をかけてくれるのは、実は、フロイトなんです。フロイトというと、生と死の本能とか、イド、エゴ、スーパー・エゴとか、そういうような言葉を直ぐに思い出されるだろうと思います。実際、そういうような言葉については、皆さんはどなたも聞いたことがあるで

しょう。学生さんにそういうことを知っているかと聞いても、皆手を挙げます。しかし、それらがどういうことを意味するかということになると、「いや、わかりません」と言いますね。ところでフロイトが、生と死の本能というようなことをいったのは、『快感原則を超えて』という論文なんです。これは、フロイトが64歳の時に書いたものなのです。それからまた、イド、エゴ、スーパー・エゴの理論が実際に発表されたのは、彼が67歳の時なのです。そして『文化への不満』という、あの非常に有名な文化論を書いたのは、70歳を越えてからでした。そして、彼は、1938年に83歳で死ぬまでに、たくさんの論文を書いているんです。だから、「もうこれで引退をしたので」というような気持ちに私はなれないのです。私は今日の定年退職の記念講演を、そういう気持ちでいるということ強調して、終わりたいと思います。皆さんの何かの参考になればと願っています。

どうも御静聴ありがとうございました。

(1991. 1.31)

履 歴

- 1917年 愛知県に出生
- 1929年 名古屋市立東田尋常小学校卒業
- 1934年 愛知県立第一中学校卒業
- 1937年 第八高等学校文科甲類卒業
- 1940年 東京帝国大学文学部社会学科卒業
- 同 年 中華民国北京国立新民学院講師
- 1947年 名古屋市立女子専門学校教授
- 1949年 岐阜大学助教授
- 1951年 南山大学助教授
- 1959年 大阪市立大学教授
- 1977年 駒沢大学教授
- 1991年 定年退職

業 績

著 書

- 1 キブツ——その社会学的分析
1965年 誠信書房
- 2 キブツの記録
1966年 誠信書房
- 3 現代社会学の基本問題（編者）
1966年 有斐閣
- 4 家族の倫理
1972年 垣内出版
- 5 家と現代家族（編者）
1976年 培風館
- 6 テキストブック社会学（7）福祉（編著）
1977年 有斐閣
- 7 ゆれ動く現代家族（監修）生命保険文化センター編
1984年 日本放送出版協会
- 8 家族と人格——家族の力動理論を目ざして
1986年 家政教育社
- 9 家族と福祉の未来——現代家族と社会福祉への提言（監修）
1987年 全国社会福祉協議会
- 10 家族と結婚——脱家父長制の理論を目ざして
1990年 家政教育社

訳 書

- 1 ストライキ（訳）E. T. ヒラー著
1950年 創元社

- 2 精神分析の基礎理論 (共訳) チャールズ・ブレナー著
1965年 誠信書房
- 3 家族の社会学理論 家族研究リーディングズⅠ (編訳著) タルコット・パーソンズ他
1971年 誠信書房
- 4 家族と結婚——その比較文化的解明 (共訳) ウィリアム・スティーヴンズ著
1971年 誠信書房
- 5 家族の診断と治療 家族研究リーディングズⅡ (編訳著) ジョン・P・スピーゲル他
1975年 誠信書房
- 6 エディプス・コンプレックス——通文化的実証 (共訳) ウィリアム・スティーヴンズ著
1977年 誠信書房
- 7 精神分析の理論 (訳) チャールズ・ブレナー著
1980年 誠信書房
- 8 家族の社会学と精神分析 家族研究リーディングズⅢ (編訳著) ローレンス・S・キュービー他
1982年 誠信書房
- 9 家族と家族療法 (監訳) サルヴァドール・ミニューチン著
1983年 誠信書房

論 文

1952年

「離婚研究の方法と統計的調査の一例」『アカデミア』南山大学 第2輯

1954年

「社会学と社会問題」『アカデミア』南山大学 第6輯

「家族の社会的機能と夫婦関係に関する1考察」『社会学評論』日本社会学

1956年

「家族における人間関係研究の課題」林恵海教授還暦記念論文集『日本社会学の課題』 有斐閣

「夫婦関係」磯村英一他編『現代家族講座』第3巻 河出書房

「家族」社会学研究編『社会学入門』朝倉書店

「都市生活における家族の機能」『都市問題』第47巻第6号

1957年

「戦後における家族の実態」(共同執筆)『社会学評論』日本社会学会 第27
・28合併号

1958年

「社会形象」「離婚」『社会学辞典』有斐閣

1959年

「社会学と精神分析」『社会学評論』日本社会学会 第36号

1960年

「家族社会学の諸問題」『大阪精神衛生研究』大阪精神衛生協議会 第5巻第
5号

「家族診断について」『大阪精神衛生研究』大阪精神衛生協議会 第6巻第1
号

1961年

「キブツにおける Collective Education とパーソナリティ発展の問題」『家政学部紀要』大阪市立大学家政学部 第7巻

「家族関係のもたらす精神的不健康——家族診断学」和田豊種編『精神衛生入門』創元社

1962年

「キブツにおける消費構造の原理」『ユダヤ・イスラエル研究』日本イスラエル文化研究会 第2巻

1963年

「家族の本質——キブツに家族は存在するか」『社会学評論』日本社会学会
第52号

「キブツにおける社会・文化・個人」『精神分析研究』日本精神分析学会 第
10巻第1号

1964年

「未来への実験——キブツ」『人間の科学』誠信書房 第10号

「ユートピア的実験の社会学」『社会福祉論集』大阪市立大学社会福祉研究
会 第10号

1965年

「家族の深層にあるもの——そのダイナミックス」『医療と福祉』川島書房
第8号

「日本におけるユートピア的実験——心境」『社会福祉論集』大阪市立大学社
会福祉研究会 第11号

1966年

「家族の社会構造——日米文化の比較を中心に」『サンケイ・アド・マンス
リー』サンケイ新聞社 第5巻第2号

「キブツにおける親子関係」『児童心理』金子書房 第20巻第11号

「家庭育児か集団育児か」『教育と医学』慶応通信 第14巻第12号

1967年

「家族の変動」森岡清美編『家族社会学』有斐閣

“Isolation of the Nuclear Family and Kinship Organization in Japan,”
Journal of Marriage and the Family, Vol.29, No.4

「日本における核家族の孤立化と親族組織」（共同執筆）『社会学評論』日本
社会学会 第69号

1968年

「ナヤール考」『家政学部紀要』大阪市立大学家政学部 第15巻

「家族力動論の背景と性格」『臨床心理学の進歩——1968年版』誠信書房

「キブツ」『社会科学辞典』第4巻 鹿児島出版

1969年

「家族社会学」1-4『看護研究』医学書院 第2巻第1号-第4号

「イスラエルにおける家庭教育」『家庭教育指導事典』帝国地方行政学会

「キブツ——その一般的性格」『民族文化』第5巻第3号

1970年

「家庭解体問題」一番々瀬康子・小山隆編『家庭と社会』現代婦人問題講座
4 亜紀書房

「家族理論——力動的理論への志向」山室周平・姫岡勤編『現代家族の社会学』培風館

「家族力動論と子どもの教育」『家庭科教育』〈5月増刊・現代の家庭教育の問題点〉家政教育社 第44巻第6号

「キブツ——その政治と社会」『民族文化』第6巻第1号

「キブツ——その経済」『民族文化』第6巻第2号

1971年

「キブツ——その将来」『民族文化』第6巻第3号

「核家族時代の精神衛生」『教育大阪』第233号

「家族の本質——その概念分析」姫岡勤・上子武次編『家族——その理論と実態』川島書店

「社会学的に見た性の問題」『家庭科教育』〈五月増刊・現代の性教育の問題〉家政教育社 第45巻第6号

「ユートピアとユートピア的実験」『社会福祉論集』大阪市立大学社会福祉研究会 第15・16合併号

1972年

「家族はどうなるか」『コミュニティ』地域社会研究所 第29号

「老人の地位と変化」那須宗一・増田光吉編『老人と家族の社会学』講座日本の老人第Ⅲ巻 垣内出版

「性と秩序」平井信義編『性教育指導事典』帝国地方行政学会

「家族の内部構造」「家族解体」『エンサイクロペディア・ブリタニカ』第4

卷

「性と家族」『公衆衛生』医学書院 第36巻第6号

「日本人の性意識」『道德教育』明治図書出版株式会社 第12巻第9号

「家庭科教育における結婚の問題」『家庭科教育』家政教育社 第46巻第13号

「家族社会学の展開」森岡清美編『家族社会学』社会学講座3 東京大学出版会

1973年

「家族における経済と性」青井和夫・増田光吉編『家族変動の社会学』培風館

「現代日本における家庭」『更正保護』法務省保護局 第24巻第9号

1974年

「家族の諸形態・総説」青山道夫他編『家族の構造と機能』講座家族2 弘文堂

「社会変動と家族病理」大橋薫他編『家族病理学』有斐閣

「日本における核家族化の現在と未来に関する1考察——核家族率との関連において」『社会学評論』日本社会学会 第98号

「家族問題と精神分析」家族問題研究会編『現代日本の家族—動態・問題・調整』培風館

1975年

「世界の子どもたち——古きもの新しきもの」『少年補導』大阪少年補導協会 第20巻第4号

「老年期の家族」長谷川和夫・那須宗一編『ハンドブック・老年学』岩崎学術出版社

1976年

「現代家族の構造と病理」大原健士郎・岡堂哲雄編『現代人の異常性(4) 現代家族と異常性』現代のエスプリ別冊至文堂

「危機を救う核家族の倫理が無い」『論展』今週の日本 第3巻第4号

「家族社会学におけるライフサイクル」『公衆衛生』〈特集・ライフサイクル

1977年

「昔の親子・今の親子——家庭像の変遷」『青年心理』〈特集・青年と親〉金子書房 第1巻第2号

“The Nuclear Family Within the Three Generational Household in Modern Japan,” in Luis Lenero-Otero (ed.), *Beyond the Nuclear Family Model : Cross-Cultural Perspectives*, SAGE Studies in International Sociology 7, London : SAGE Publications.

「家族の情緒構造」森岡清美編『テキストブック社会学（2）家族』有斐閣

1978年

「現代社会における家族の機能」『更正保護』日本更生保護協会 第29巻第11号

1979年

「家族社会学とフロイトと私」『書斎の窓』有斐閣 第280号

「日本における家族史の原点に関する覚書」『社会福祉論集』〈特集・生活福祉の諸問題〉大阪市立大学社会福祉研究会 第17.18 合併号

「核家族の現代的意義とその行方」『日本の家族』法学セミナー増刊 日本評論社

「家族と福祉を考える——家族社会学の立場から」『家族研究年報』家族問題研究会 第5号

1980年

「核家族に対応したライフスタイル」『メンズタイム』ブティック社 第4号

「父親不在を衝く」（対談）『新世』倫理研究所 第34巻第3号

「性と家族」『月刊NIRA』NIRA総合研究開発機構 第2巻第7号

「現代社会における家族の諸問題」『ケース研究』家庭事件研究会 第204号

「社会階層と社会病理」那須宗一編『家族病理学』家族病理学講座第1巻 誠信書房

「社会変動と家族」『真理と創造』中央学術研究所編 第16号

1981年

「老人と家族」『生活と福祉』全国社会福祉協議会 第297号

「家族の解体と病理」『社会変動への対応』社会保障講座3 総合労働研究所

1982年

「核家族」「家族」『医科学大事典』講談社 第6・7巻

1983年

“Sex and The Family : The Nature of the Family as a Human Institution,” *Komazawa Journal of Sociology* No.15.

「性と結婚」『社会科学討究』早稲田大学社会科学研究所 第83号

「家族の制度的変動」森岡清美編『家族社会学』新版 有斐閣

1984年

「ヒトはなぜ家族をつくるのか」『看護学生』〈特集・文化としての人間②・家族〉メヂカルフレンド社 第31巻第12号

“Sex and Marriage,” *Komazawa Journal of Sociology* No.16.

「これからの時代の子どもと親」『ほっかいどう青少年』北海道青少年育成協会 1984年7月号

1985年

「家族の曲がり角——1960年代と家族研究」『家政学雑誌』日本家政学会 第36巻第2号

「新しい家族像のために」『世界』岩波書店 1985年2月号

「家族とは何か——潜在的家族崩壊について」生命保険文化センター編『いまの家族これからの家族』日本放送出版協会

「あるニュータウンにおける社会的ネットワークの研究」『現代家族の諸問題のための基礎研究』生命保険文化センター

「揺れる現代の家族」『JAPONICA 時事百科』小学館

「人間にとって家族とは」『夫婦・家庭』講座現代・女の一生4 岩波書店

「現代家族の諸問題について」『家庭科教育研究協議会研究集録』北海道高等学校長協会家庭部会

「離婚に対する発想の転換」『家族研究年報』家庭問題研究会 第11号

1986年

「ゆれ動く現代家族」『教化研修』曹洞宗教化研究所 第29号

「老人問題は育児問題——家族過程と親子関係」伊藤光晴監修 生命保険文化センター編『21世紀の家族像』日本放送協会

1987年

「核家族」「ライフサイクル」「育児の社会化」「家族と社会」『世界』〈臨時増刊・世界を読むキーワード2〉岩波書店

「家族とは——とくにライフサイクルの視点から」『家庭科教育』家政教育社 第61巻 第3号

「21世紀の家族像——ライフスタイルの変化の中で」『TRIVIEW』東急総合研究所 第1巻第2号

「社会学から見た家族の諸問題」『家庭と社会』上智大学学内共同研究

「子どもの成長と家族の役割」『母と子の望ましい成長を願って』神戸YMCA教育委員会

1988年

「変貌する家族——社会学からみた現代の家族像」『メディカル・ヒューマニティ』第3巻第1号

「老いをめぐる家族心理学の課題と解決に向ける——社会学の立場から」日本家族心理学会編『家族心理学年報』6 金子書房

「21世紀の家族」『プライマリー・ケア』9 日本プライマリー・ケア学会

「性の社会的制限」『明治大学社会・人類学年報』第2号

1989年

「ギリシャにおける男女平等」『駒沢社会学研究』第21号

「家族の現在とゆくえ」『看護研究』第22巻第2号 医学書院

1990年

「家族の学際的研究」『サイコロジスト』日本心理学会諸学会関連総会

「核家族を甦らせる高齢者問題」『経済往来』第42巻第4号